

## 知的障害児における課題従事順序の選択が 課題従事行動に及ぼす効果

村 中 智 彦\*・藤 原 義 博\*\*

(平成15年 4 月30日受付；平成15年 6 月16日受理)

### 要 旨

本研究では、知的障害児の課題場面において、①子どもの選択行為それ自体が課題従事行動を高める効果を持つか、②対象児の課題従事順序の選択が課題従事行動に規定されるかを検討した。6～7歳の知的障害児4名を対象に、母親への聞き取り、観察による課題従事行動の分析を通じて、対象児の課題従事行動の低い3つの机上課題を選定した。反転計画法（ABAB デザイン）を適用し、対象児が3つの机上課題に従事する事態において、対象児が課題従事順序を選択できる条件、対象児が課題従事順序を選択できない条件を実施し、課題従事行動を比較した。その結果、4名の対象児とも、選択、非選択条件で課題従事行動のレベルの差異は認められず、2名の対象児において課題従事行動のレベルは課題によって異なる傾向が明らかになった。また、対象児の課題従事順序の選択は課題従事行動に規定されなかった。

### Key Words

choice of task sequence	課題従事順序の選択
act of choice-making itself	選択行為それ自体
children with intellectual disabilities	知的障害児
task engagement behavior	課題従事行動

### I. 問 題

知的障害児の課題場面において、対象児が課題を選択できる条件では、対象児が課題を選択できない条件よりも、対象児の課題従事行動は高まること（以下、「選択条件の効果」）が報告されている（Dattilo & Rusch, 1985；Dibley & Lim, 1998；Dunlap, dePerczel, Clarke, Wilson, Wright, White, & Gomez, 1994；Dyer, Dunlap, & Winterling, 1990；Moes, 1998）。近年、選択条件の効果に関わるメカニズムの検討が行われ、課題の好み（preference）と対象児の選択行為それ自体（the act of choice-making itself）の2つの要因が示唆されている。

課題の好みの要因では、対象児は課題を選択することで好みの高い課題に従事でき、好みの高い課題への従事が課題従事行動を高めるという説明がなされる（Bambara, Ager, & Koger, 1994；Cole, Davenport, Bambara, & Ager, 1997；Lerman, Iwata, Rainville, Adelins, Crossland, & Kogen, 1997；Parsons, Reid, Reynolds, & Bumgarner, 1990）。指導者は対象児に課

---

\* 障害児教育実践センター

\*\* 障害児教育講座

題の選択機会を提供することによって好みの高い課題を同定できる (Fisher, Thompson, Piazza, Crosland, & Gotjen, 1997; Roscoe, Iwata, & Kahng, 1999; Sigafoos & Dempsy, 1992)。また、対象児にとって好みの高い課題では課題従事行動は高まることが報告されている (Koegel, Dyer, & Bell, 1987; Morrison & Rosales-Ruiz, 1997)。これらの知見より、課題の好みの要因に基づく選択条件の効果の説明は妥当であると考えられる。

対象児の選択行為それ自体の要因では、課題の好みの要因を超えて、対象児が課題を選択する行為それ自体が課題従事行動を高める効果を持つという説明がなされる (Dunlap ら, 1994; Moes, 1998; 村中・藤原・小林, 2001a; 村中・関口・藤原, 2002)。しかし、Lerman ら (1997) は、課題の好みの要因を支持する実験結果を報告し、対象児の選択行為それ自体が課題従事行動を高める効果を持たないことを示唆しており、対象児の選択行為それ自体の要因については明らかにされていない。この要因を最初に実証した Dunlap ら (1994) は、先行する選択条件で対象児が選択した課題を後続する非選択条件で対象児に従事させるという YNC (yoked-no-choice) 条件という手続きを用いて実験を行った。そして、選択条件で、YNC 条件よりも対象児の課題従事行動の生起レベルが高まったことから、対象児の選択行為それ自体の要因を示唆した。しかし、Fisher ら (1997) は、Dunlap らの研究では、選択条件において、対象児が選択した課題が一貫していなかったことから、YNC 条件で対象児の好みは反映されていなかったと指摘している。対象児の課題の好みは課題従事体験を通じて変動することが報告されている (Cole ら, 1997; Kennedy & Harding, 1993; Wehmeyer, 1998)。対象児の好みは変動するという結果からも、好みの変動に左右されない YNC 条件以外の手続きによる検討が求められる。

村中 (2003) は、YNC 条件以外の手続きとして、課題従事順序の選択 (choice of task sequence) 条件の適用を提案している。先行研究の多くでは、選択条件で、対象児が「どの課題に従事するのか」という課題の選択条件が実施されている。この課題の選択条件では、対象児は好みの高いもの 1 つを選択し従事する事態に置かれる。つまり、選択、非選択条件で、また同条件内においても対象児の従事する課題は異なるため、課題の好みにもとづく選択条件の効果が生じる可能性は残される。一方、課題従事順序の選択条件では、対象児が選択するのは「どの課題から先に従事するのか」の順序であり、選択、非選択条件に関係なく対象児が従事する課題は同じであり、課題の好みにもとづく選択条件の効果は生じない。また、選択、非選択条件で対象児の従事する課題は同じであることから、課題従事体験を通じた課題の好みの変動を考慮する必要はない。つまり、選択条件に課題従事順序の選択を適用し、選択条件の効果が認められれば、その効果の要因が対象児の選択行動それ自体に起因していると考えられる。

先行研究において、課題従事順序の選択条件を適用したものは 2 編ある (Bambara ら, 1995; Moes, 1998)。2 編とも選択条件の効果を報告しているが、これらの 2 編では、選択条件において、課題従事順序、課題に従事する場所、そして課題に使用する教材など、セッションを通じて多様な選択機会が提供される手続きが適用されている。従って、選択、非選択条件で、対象児が課題に従事する場所や課題に使用される教材は異なり、従事した課題も一部異なっていたため、課題の好みにもとづく選択条件の効果が生じた可能性は高いと考えられる。

本研究の目的は、知的障害児の課題場面において、対象児の選択行為それ自体が課題従事行動を高めるか効果を持つか否かを検討するために、課題従事順序の選択、非選択条件を実施し、両条件で課題従事行動を比較した。選択条件の効果が認められれば、対象児の選択行為それ自

体の要因を示唆できるであろう。第二の目的は、対象児の課題従事順序の選択を規定する要因についての基礎的知見を得ることである。課題従事順序の選択条件を採用した Bambara ら (1995), Moes (1998) の2編では、対象児の課題従事順序の選択が何の要因に規定されたかの知見は示されていない。選択条件において、課題の選択機会を採用した先行研究では、対象児の選択した課題間に偏向が認められれば、課題間の好みを示唆されており、対象児は課題間の相対的な好みにもとづいて選択を行うことが示唆されている (Hughes, Pitkin, & Lorden, 1998; Shevin & Klein, 1984)。しかし、課題従事順序の選択条件では、対象児は好みの課題のみではなく用意された全ての課題に従事する事態に置かれる。このような事態において、対象児の課題従事順序の選択を規定する要因は明らかにされていない。要因として課題の好みは推測され、対象児は好みの高い (課題従事行動の高い) 課題から先に選択すると考えられる。

## II. 方 法

### 1. 対象児

4名の知的障害児 (A, B, C, D 児) であった。4名とも、平成13年6月～14年3月まで、J大学障害児教育実践センターで行われる臨床教室に参加していた。臨床教室は、指導者との個別指導形態で、個々のレベルに応じた課題学習で構成した。指導者は大学教官2名とスーパーバイズを受けた大学院生であった。指導開始期における対象児の実態は以下のとおりである。

1) A 児：7歳のダウン症女児。小学校特殊学級1学年に在籍し、多語文の発語による会話ができた。発語も明瞭であった。ひらがな、カタカナ50音の読字と書字が一部できた。

2) B 児：7歳の自閉傾向を伴う知的障害男児。小学校特殊学級1学年に在籍し、簡単な言語指示に応じることができた。母親や指導者に促されれば、20語ほどの単語の発語もできたが発語は不明瞭であった。自発発語は乏しく、日常場面の要求時には相手の手を持って対象物に接近するなど動作による表出がほとんどであった。

3) C 児：7歳の自閉傾向を伴う知的障害男児。知的障害養護学校1学年に在籍し、指さしなどの簡単な動作指示を理解して動くことは一部できた。有意味な発語はなかった。日常場面の要求時には、相手の手を持って対象物に接近するなど動作による表出がほとんどであった。母親が繰り返し促せばチョーダイ動作で要求することもできた。

4) D 児：6歳の知的障害男児。公立保育所年長児クラス (健常児との混合クラス) に在籍し、衣服の着脱、排泄などの身の辺の自立も介助が必要であった。課題場面では多くの項目で身体的ガイダンスを必要とした。「ママ」「こいのぼり」など10語程度の明瞭な発語があったが、それらの使用は文脈に関係なく機能的な自発言語は認められなかった。要求児には、対象物を直接手にいれようとする事が多く、また相手の手を持って強引に連れて行こうとする行動も認められた。

### 2. 実験課題の選定

対象児ごとに3つの実験課題を選定するために、1) 母親への聞き取り、2) 観察による課題従事行動の分析を行った。

1) 母親への聞き取り：母親に対して、指導者が事前に抽出した25の机上課題に対する対象児の好みをインタビューした。課題は、指導者のあらかじめ決まった教示以外に偶発的な働

きかけの生じにくいものを抽出した。母親に、課題の名称、ねらい、手続きについて課題物の写真を見せながら説明し、「非常に好き」「好き」「嫌い・やったことがない」の3件法で評定してもらった。対象児ごとに、母親が「非常に好き」と評定した課題を除き、「好き」「嫌い・やったことがない」と評定した8～13の課題を選定した。「非常に好き」と評定された課題では、先行研究の知見より (Vaughn & Horner, 1997; Lerman ら, 1997; 村中・藤原, 2001b), 選択, 非選択条件に関係なく、対象児の課題従事行動は高くなることが予測されたために除外した。

2) 観察による課題従事行動の分析: 「好き」「嫌い・やったことがない」と評定された8～13の課題に、対象児に実際に従事してもらい、観察によって課題従事行動を分析した。

(1) 期間: 平成13年6月下旬～12月上旬, 観察セッションを実施した。

(2) 観察セッションと設定: 観察セッションは、週1回、約1時間半の臨床授業の中で行った。観察セッションの所要時間は20～30分であった。指導室内の設定を図1に示した。指導室内には、課題物の写真カード (以下、「カード」) を置く机と対象児と指導者が対座して課題を行う机、2つの椅子を置いた。部屋の隅に、8 mm ビデオカメラを三脚を固定し、記録者1名がビデオ録画を行った。

(3) 観察手続き: Vaughn & Horner (1997) の手続きを参照した。対象児と指導者は机をはさんで対座した。指導者は、1枚のカードの置かれた机を指し、「カードを取ってきてください」と教示した。指導者は、対象児がカードの置かれた机に移動し、カードを取って指導者に手渡すという一連の行動を形成した。指導者は、対象児から手渡されたカードに対応する課題の名称を言い、「(課題名) を始めます」と言い、対応する課題物を対象児に渡して課題を始めた。指導者は、対象児が正しく課題に従事したとき、声かけや身体接触による賞賛を適宜行った。課題中に、対象児の離席など課題に従事しない行動が認められたとき、10秒ごとに、言語指示 (「〇〇をやりましょう」), 言語指示と動作指示 (課題物を指さす), 身体的援助 (対象児の手を持って従事させる) の段階的指導を行った。以上の手続きで、各課題とも、3～5試行実施した。1セッション中に3つの課題に従事する試行を行った。

(4) 標的行動: 課題従事行動を標的とした。Dunlap ら (1994) を参照し、指導者の指示に従って課題に取り組む行動と定義し、対象児ごと、課題ごとに設定した。例えば、絵本課題では、絵本の方に視線を向ける、絵本に関連して指導者に質問を行う行動とし、工作課題では、紙を持つ、はさみで切る、のりをつける行動とした。また、不適切な発声発語 (課題に関係のないことを指導者に話すなど), 同じ動作の反復 (手をひらひらさせるなど), 不従順な行動 (許可のない離席など), 自傷・他傷, 教材や指導者以外の方向に2秒以上視線が向く行動が認められたときは課題に従事していないと判断した (Cole ら, 1997; Persons ら, 1990; Seybelt, Dunlap, & Ferro, 1996)。

(5) 結果の処理: 分析はビデオ録画に

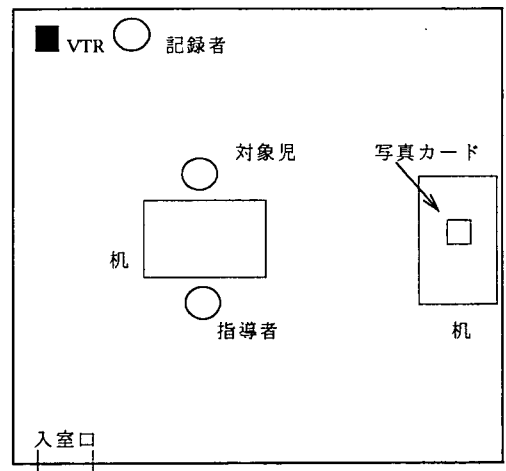


図1 指導室の設定

もとづき、10秒間の全体インターバルレコーディング記録法 (Alberto & Troutman, 1986) を使用して行った。10秒のインターバル中、継続して課題従事行動が生じた場合に当該行動が生じたと記録した。上述した課題に従事していない行動が1回でも生じた場合に当該行動が生じなかったと記録した。セッションごとに当該行動が生じたインターバルの割合を「課題従事行動が生じたインターバルの割合 (以下、「従事率」, %) = 課題従事行動が生じたインターバル数 / 総インターバル数  $\times$  100」の式で算出した。

(6) 結果：従事率の結果を図2に示した。図2より、従事率の平均値が相対的に低く上昇傾向にないことを基準に、対象児ごとに3つの実験課題を選定した。A児では「工作」「絵本」「ひも通し」、B児では「さるかに (さるかに合戦の絵本)」「おむすび (おむすびころりの絵本)」「はなさか (はなさかじいさんの絵本)」, C児では「パズル」「工作」「絵本」, D児では「絵本のん (のんたん)」「絵本やん (やんちゃでもんちゃ)」「色ぬり」が選定された。

### 3. 実験

1) 期間：平成13年12月上旬～14年3月、実験セッションを実施した。

2) 設定：2—2) の観察による課題従事行動の分析と同じであった。

3) 手続き：非選択条件 (No-Choice 条件, 以下、「NC 条件」), 選択条件 (Choice 条件, 以下、「C 条件」) のいずれかを適用するセッションを実施した。

(1) NC 条件 (対象児が課題従事順序を選択できない条件)：2—2) の観察による課題従事行動の分析と同じ手続きであった。

(2) C 条件 (対象児が課題従事順序を選択できる条件)：指導者は、3つ (もしくは2つ) のカードの置かれた机を指さし、「やりたい課題のカードを1枚取ってきてください」と言った。指導者は、対象児が2つのカードを持ってきた場合、また10秒以上カードをもってこなかった場合、2つのカードを両手に持って対象児に対提示し、「どっちをやりますか」と言って、対象児が先に触れた方のカードを取らせた。対象児のカードを取る行動が選択反応であるか否かを査定するために、対象児の取ってきたカードの課題を含む2つの課題物 (実物) を対提示して「どっちが〇〇 (課題名) ですか」と言い、対象児の取ってきたカードに対応する課題物を取らせた。

(3) 標的行動：①従事率、②対象児の課題従事順序の選択反応の2つであった。

①従事率：2—2) の観察による従事率の分析と同じであった。

②対象児の課題従事順序の選択反応：C 条件における対象児の課題従事順序の結果、指導者の課題物 (実物) の対提示に取ってきたカードに対応する課題物を受け取ったか否か (正反応, 誤反応)、取ってきたカードの位置 (右, 左) の偏向を記録した。

(4) 実験デザイン：反転計画法 (ABAB デザイン) (Barow & Hersen, 1984) を適用した。A, B, C 児の3名では、NC 条件もしくは C 条件を実施する6つのフェイズで実験を構成した (対象児 D では事情から4つのフェイズ)。フェイズ1, 3, 5 では NC 条件、フェイズ2, 4, 6 では C 条件を実施した。本研究の仮説にもとづくと、対象児の選択行為それ自体が課題従事行動を高めるのであれば、従事率の生起レベルは C 条件のフェイズ2, 4, 6 において、NC 条件のフェイズ1, 3, 5 よりも高くなると考えられる。

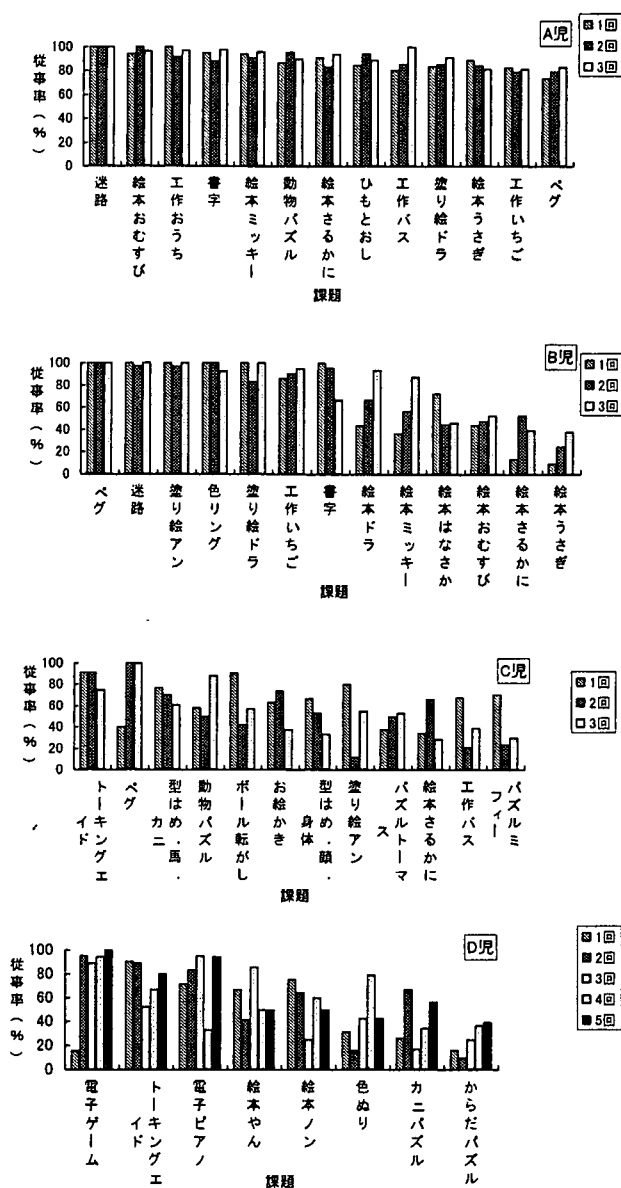


図2 観察による従事率の結果

### III. 結 果

#### 1. 従事率

対象児の従事率の結果を図3に示した。図3からも明らかなように、A, B, C, D児とも、C条件、NC条件における従事率の差異は認められなかった。

A 児の従事率は、3 課題とも、フェイズ 1～6 を通じて高いレベルであった。

B, D 児の 2 名では、課題の間で従事率の差異が認められる。B 児の「さるかに (さるかに戦の絵本)」課題の従事率は他の 2 つの課題よりも高いレベルを示し、また、D 児の「色ぬり」課題の従事率は他の 2 つの課題よりも低いレベルを示した。

## 2. 対象児の課題従事順序の選択反応と従事率との関連

C 条件で、対象児がカードを取ってきた順序を表 1 に示した。

1) A 児: 表 1 より、C 条件のセッションのうち、1 番目に「工作」課題のカードを取ったのは 7 回であった (87.5%)。A 児は、セッション 5, 6, 10, 11, 12, 15 において、「工作」「絵本」「ひも通し」という一定の順序でカードを取った。A 児のカードを取る反応は、机上に

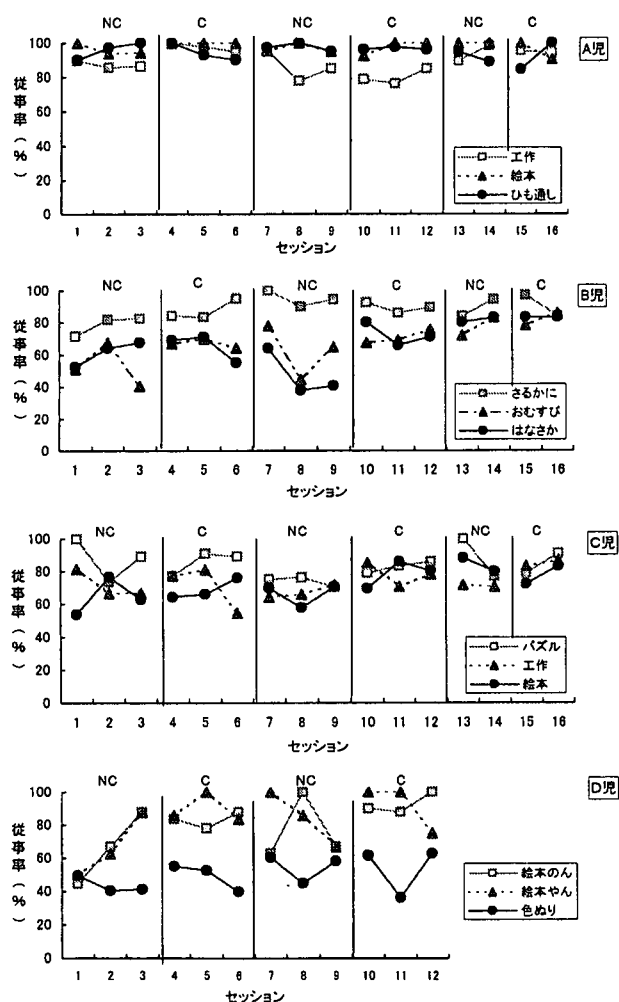


図 3 従事率の結果

置かれた3つ（または2つ）のカードの中から1つを取るという明確な反応であった。カードを取る際に、「いちご（工作）からやる」などの自発発語も認められた。A児が取ったカードの提示位置（右、左）による偏向は認められなかった。カードを取ってきた後に行った指導者の課題物（実物）の対提示への正反応率は100%であった。

課題従事順序の選択反応と従事率との関連では、1番目に従事することの多かった「工作」課題の従事率のレベルは、他の2課題に比べて低い傾向にあったが明確な差異とはいえない。

2) B児：カードを取った順序では、特定の課題を最初に持ったり、一定の順序は認められなかった。カードを取る反応では、C条件の全セッションにおいて、机の上に置かれた3つ（または2つ）のカードの中から1つを取るという明確な反応が認められた。A児の取ったカードの提示位置による偏向は認められなかった。指導者の課題物の対提示への正反応率は100%であった。

課題従事順序の選択反応と従事率との関連は認められなかった。「さるかに」課題の従事率のレベルは、他の2課題に比べて高かったが先に選択される傾向はなかった。

3) C児：C条件の8セッションのうち、最初に「絵本」課題のカードを取ってきた回数は最も多かった（6回）。カードを取る反応では、セッション5、6、10、11において、2枚のカードを同時に両手で取る反応が認められた（全選択機会16回の6回、37.5%）。1枚のカードを取ってきた反応が認められた10回の選択機会においても、左側のカードを取る反応は7回（70.0%）と高く位置偏向が認められる。C児は、計16回の指導者の課題物の対提示に対して、いずれの課題物も取らないか、両手を合わせるチョーダイ動作を示すだけの反応が8回（50.0%）あった。指導者の課題物の対提示に対する正反応率は62.5%であった。課題物の対提示においても、左側に提示された課題物を取った割合は88.9%であった。

C児の課題従事順序の選択反応と従事率との関連は認められなかった。

4) D児：C条件の全セッションにおいて、1番目に「絵本やん」課題のカードを取ってきた。D児が取ったカードの提示位置による偏向は認められなかった。指導者の課題物の対提示への正反応率は75%で、いつも1番目であった「絵本やん」の正反応率は66.7%であった。

D児が最初に取りってきた「絵本やん」課題の従事率のレベルは、「色ぬり」課題に比べて高く、「絵本のん」課題と同じであった。

表1 対象児の課題従事順序の選択結果

A児			
セッション	1	2	3
4	工作	ひも通し	絵本
5	工作	絵本	ひも通し
6	工作	絵本	ひも通し
10	工作	絵本	ひも通し
11	工作	絵本	ひも通し
12	工作	絵本	ひも通し
15	工作	絵本	ひも通し
16	絵本	工作	ひも通し
課題物（実物）の対提示への正反応率=100%			
B児			
セッション	1	2	3
4	おむすび	はなさか	さるかに
5	さるかに	はなさか	おむすび
6	はなさか	さるかに	おむすび
10	おむすび	はなさか	さるかに
11	はなさか	さるかに	おむすび
12	さるかに	おむすび	はなさか
15	はなさか	さるかに	おむすび
16	さるかに	はなさか	おむすび
課題物（実物）の対提示への正反応率=100%			
C児			
セッション	1	2	3
4	絵本	工作	パズル
5	絵本	パズル	工作
6	工作	パズル	絵本
10	絵本	パズル	工作
11	パズル	絵本	工作
12	絵本	パズル	工作
15	絵本	工作	パズル
16	絵本	工作	パズル
課題物（実物）の対提示への正反応率=62.5%			
D児			
セッション	1	2	3
4	絵本やん	色ぬり	絵本のん
5	絵本やん	絵本のん	色ぬり
6	絵本やん	色ぬり	絵本のん
10	絵本やん	絵本のん	色ぬり
11	絵本やん	絵本のん	色ぬり
12	絵本やん	色ぬり	絵本のん
課題物（実物）の対提示への正反応率=75.0%			



#### IV. 考 察

##### 1. 課題従事順序の選択条件の効果

本研究では、知的障害児4名の課題場面において、対象児が課題従事順序を選択できる条件、対象児がそれを選択できない条件を実施し、対象児の従事率を比較した。その結果、4名とも、選択、非選択条件における従事率の差異は認められなかった。

各対象児の選択反応の結果より、A、B児の2名では課題従事順序の選択を行っていたと考えられる。A、B児は、机上の3つ(もしくは2つ)のカードから1つを取るという明確な反応を示した。カードの提示位置による偏向は認められず、指導者の課題物の対提示への正反応率は100%であった。しかし、C児は、16回の選択機会のうち6回、2つのカードを同時に取る反応を示し、左側のカードを取るという提示位置による偏向を示した。これらの結果から、C児のカードを取る反応は課題従事順序の選択反応ではなかったと考えられる。D児は、C条件の全セッションで1番目に特定のカードを取る反応を示した。カードの提示位置による偏向は認められなかったが、指導者の課題物の対提示への正反応率は75%で、いつも1番目であった特定の課題の正反応率も66.7%であった。これらの結果から、D児のカードを取る反応が、課題従事順序を選択する反応として確立していたとはいえないであろう。

明確な選択反応を示したA、B児の2名で選択条件の効果が認められなかった結果は、選択行為それ自体が対象児の課題従事行動を高めるという先行研究の知見を支持しない(Dunlapら, 1994; Moes, 1998)。しかし、本研究の結果より、対象児の選択行為それ自体の要因が対象児の課題従事行動を高める効果はないと結論づけることは早急であろう。対象児の選択行為それ自体の要因に関連して、指導者の選択機会の提供は対象児の状況統制(control over the situation)を高めることが示唆されている(Bambara, 1996; Lancioniら, 1996; Romaniuk & Miltenberger, 2001; Sigafoos, 1998)。Bambara (1996)は、活動や他者の行為を統制することは、好みの表出とならんで非常に重要な選択行為の結果であることを示唆している。Sigafoos (1998)は、選択機会の提供による対象児の統制と自律性(autonomy)の増加が対象者の挑戦的行動(challenging behavior)の低減に機能することを示唆している。対象児の選択行為それ自体の要因とは、対象児の選択行為による状況統制の増加と考えられる。つまり、対象児の選択行為による状況統制の増加が課題従事行動を高める効果を生じさせるのではないかと考えられる。本研究の選択条件において、対象児が選択行為によって統制できたのは課題に従事する順序のみであった。一方、対象児の選択行為それ自体の要因を示唆した先行研究で対象児が選択行為によって統制できたのは従事する課題そのものや教材であった(Dunlapら, 1994; Moes, 1998)。本研究で用いた課題従事順序の選択条件における対象児の統制の程度は、Dunlapら(1994)の課題や教材の選択条件に比べて低いと考えられる。今後の課題は、対象児の選択行為それ自体の要因が課題従事行動を高める条件について、対象児の状況統制の程度の観点から検討することであろう。対象児の状況統制の程度が高い条件では、対象児の選択行為それ自体の要因が課題従事行動を高める効果を示すのかもしれない。

本研究の結果では、対象児の従事率のレベルはB、D児で認められたように、課題従事順序の選択、非選択条件よりも、「どの課題に従事したのか」という課題に左右された。B児の「さるかに」課題の従事率は他の課題よりも高く、D児の「色ぬり」課題の従事率は他の課題より

も低いレベルであった。この結果は、対象児の従事する課題によって対象児の課題従事行動は規定されるという先行研究の知見と一致する（村中・藤原，2001b；Vaughn & Horner, 1997）。

## 2. 対象児の課題従事順序の選択と従事率との関連

各対象児の選択反応の結果より、A, B 児の2名は課題従事順序を選択を行っていたと考えられる。課題従事順序の選択と従事率との関連を見ると、A 児では、課題従事順序の選択に特定のパターンが認められたが、従事率の高い課題から先に選択するなどの傾向はなかった。同様に、B 児では、課題従事順序の選択に特定の順序パターンが認められず、従事率の高い課題から先に選択する傾向はなかった。以上のことから、対象児の課題従事順序の選択を規定する要因について、本研究では、課題従事行動の高い課題から先に選択する傾向は認められなかった。課題従事順序の選択は課題従事行動以外の要因に左右されるのであろう。課題従事順序の選択を規定する要因の解明については今後の課題として残される。

## 文 献

- Alberto, P. A. & Troutman, A. C. (1986) *Applied Behavior analysis for teachers* : Second edition. 佐久間徹・谷晋二監訳 (1994) はじめての応用行動分析. 二瓶社.
- Bambara, L. M. & Koger, F. (1996) Opportunities for daily choice making. *Innovations*. Washington, D. C., American Association on Mental Retardation to Practice Series.
- Bambara, L. M., Koger, F., Katzer, T., & Davenport, T. A. (1995) Embedding choice in the context of daily routines : An experimental case study. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 20, 185-195.
- Bambara, L. M., Ager, C., & Koger, F. (1994) The effects of choice and preference of adults with severe disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 27, 555-556.
- Barlow, D. H. & Hersen, M. (1984) *Single case experimental designs : Strategies for studying behavior change*. 高木俊一郎・佐久間徹監訳 (1988) 一事例の実験デザイン : ケーススタディの基本と応用. 二瓶社.
- Cole, C. L., Davenport, T. A., Bambara, L. M., & Ager, C. L. (1997) : Effects of choice and task preference on the work performance of students with behavior problems. *Behavioral Disorders*, 22, 65-74.
- Dattilo, J. & Rusch, F. R. (1985) Effects of choice on leisure participation for persons with severe handicaps. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 10, 194-199.
- Dibley, S. & Lim, L. (1998) Providing choice making opportunities within and between daily school routines. *Journal of Behavioral Education*, 9, 117-132.
- Dunlap, G., dePerczel, M., Clarke, S. Wilson, D., Wright, S., White, R., & Gomez, A. (1994) Choice making to promote adaptive behavior problems. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 27, 505-518.
- Dyer, K., Dunlap, G. & Winterling, V. (1990) Effects of choice making on the serious problem behavior of students with severe handicaps. *Journal of Applied Behavior*

- Analysis, 23, 515-524.
- Fisher, W. W., Thompson, R. H., Piazza, C. C., Crosland, K., & Gotjen, D. (1997) On the relative reinforcing effects of choice and differential consequences. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 30, 423-438.
- Hughes, C. Pitkin, S. E., & Lorden, S. W. (1998) : Assessing preferences and choice of persons with severe and profound mental retardation. *Education and Training in Mental Retardation and Developmental Disabilities*, 33, 299-316.
- Kennedy, C. H. & Harding, T. G. (1993) Teaching choice making during social interactions to students with profound multiple disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 26, 63-76.
- Koegel, R. L., Dyer, D., & Bell, L. K. (1987) The influence of child preferred activities on autistic children's social behavior. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 20, 243-252.
- Lancioni, G. E., O'Relly, M. F., & Emeson, E. (1996) A review of choice research with people with severe and profound developmental disabilities. *Research in Developmental Disabilities*, 17, 391-411.
- Lerman, D. C., Iwata, B. A., Rainville, B., Adelins, J. D., Crosland, K., & Kogen, J. (1997) Effects of reinforcement choice on task responding individuals with developmental disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 30, 411-422.
- Moes, D. R. (1998) Integrating choice-making opportunities within teacher-assigned academic tasks to facilitate the performance of children with autism. *Journal of The Association for Persons with Severe Handicaps*, 23, 319-328.
- Morrison, K. & Rosales-Ruiz, J. (1997) The effect of object preferences on task performance and stereotypy in a child with autism. *Research in Developmental Disabilities*, 18, 127-137.
- 村中智彦 (2002) 知的障害者における選択機会の効果に関わる文献的考察. 上越教育大学研究紀要, 22(1), 59-73.
- 村中智彦・関口悦子・藤原義博 (2002) 一知的障害児の選択機会の提供による課題従事行動の向上. 上越教育大学研究紀要, 21(2), 691-700.
- 村中智彦・藤原義博・小林貞子 (2001a) 一自閉症児における課題の選択が課題従事行動に与える効果. 教育実践学論集, 2, 1-10.
- 村中智彦・藤原義博 (2001b) 知的障害児における課題の選択が課題従事行動に及ぼす効果: 課題に対する好みのレベルからの検討. 日本行動分析学会第19回年次大会発表論文集, 126-127.
- Parsons, M. B., Reid, D. H., Reynolds, J., & Bumgarner, M. (1990) Effects of chosen versus assigned jobs on the work performance of persons with severe handicaps. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 23, 253-258.
- Romaniuk, C. & Miltenberger, R. G. (2001) The influence of preference and choice of activity on problem behavior. *Journal of Positive Behavior Interventions*, 3, 152-159.
- Roscoe, E. M., Iwata, B. A., & Kahng, S. W. (1999) Relative versus absolute reinforcement effects : Implications for preference assessments. *Journal of Applied Behavior Analysis*.

- sis, 32, 479-493.
- Seybels, S., Dunlap, G. & Ferro, J. (1996) The effects of choice-making on the problem behavior of high school students with intellectual disabilities. *Journal of Behavioral Education*, 6, 49-65.
- Shevin, M. & Klein, N. K. (1984) : The importance of choice-making skills for student with severe disabilities. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 9, 159-166.
- Sigafoos, J. (1998) Choice making and personal selection strategies. Luiselli, J. & Cameron, M. (Ed) : *Antecedent control*. Baltimore : Paul H. Brookes. pp.187-221.
- Sigafoos, J. & Dempsy, R. (1992) Assessing choice making among children with multiple disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*. 25, 747-755.
- Vaughn, B. & Horner, R. H. (1997) Identifying instructional tasks that occasion problem behaviors and assessing the effects of student versus teacher choice among these tasks. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 30, 299-312.
- Wehmeyer, M. L., Agran, M., & Hughes, C. (1998) Teaching self-determination to students with disabilities. Baltimore : Paul H. Brookes

## Effects of Choice of Task Sequence on Task Engagement Behavior in Children with Intellectual Disabilities.

Tomohiko MURANAKA\*, Yoshihiro FUJIWARA\*\*

### ABSTRACT

Providing opportunities to make choice among tasks has improved the task engagement behaviors in a child with intellectual disabilities. The effects of the child's act of a choice-making itself on task engagement behaviors were examined with four children with intellectual disabilities in three academic tasks situation. In addition, the factor which influenced the participant's choice of the task sequence were examined. Before the experiment, three lower tasks of the engagement behaviors were identified for each participant via preference assessments. With a reversal (ABAB) treatment design, participants were exposed to choice and no-choice conditions. During the choice sessions, the participants chose the sequence in which three tasks were completed. During the no-choice sessions, the teacher chose the sequence in which three tasks were completed. Results indicated that all participants exhibited similar rates of task engagement behaviors across choice and no-choice conditions. The findings suggested that the participant's act of choice-making itself hasn't produced the effects. The participant's choice of the task sequence weren't connected with the task engagement behaviors.

---

\* Demonstration and Research Center for the Handicapped

\*\* Division of Special Education